

# 時間・概念・自我

## — ヘーゲル時間論を考える

米 永 政 彦

ヘーゲルの時間論は、自然と精神、概念と自我、時間と永遠、直線と円環などの問題領域をめぐって難解でかつ相互に矛盾するような命題が続出し、読む者をしてあたかも迷路に迷い込んだかのような感を抱かせるに十分である。

たとえば、「理念、精神は時間をこえている。なぜならそれらは時間の概念そのものだから。それらは永遠で即自的かつ対自的であり時間へと引き裂かれていない」(9・51)<sup>(1)</sup>と言われるかと思えば、「世界史は、理念が空間において自然として開示されるように、時間のうちにおける精神の開示である」<sup>(2)</sup>とか、「精神は時間におちこむ」と相反したことが言われる。ヘーゲル哲学が矛盾の海を縦横にかつ徹底的に経めぐる哲学であるからには、ヘーゲルを読むということは、このような迷路を忍耐強くたどることが要請されるということであろう。

本論はヘーゲル時間論の基本的枠組みをなすと思われる、

I 時間、概念、自我の関わりの問題

II 時間の三次元である過去、現在、未来の構造、ならびに永遠と時間の関わりの問題

を中心にヘーゲル時間論の世界を明らかにすることを目的とするものである。

I 時間、概念、自我

時間、概念、自我に関するヘーゲルの見解は次のような文章に代表される。少し長いが後述の議論のために、まず引用しておこう。(引用文の下線は引用者による)

A. 「時間について、それは絶対的な考察方法においては根絶されていると言われるなら、それは過ぎ去りやすさ (Vergänglichkeit) または否定的性格の故に非難されているのである。しかし、この否定性は絶対的概念そのものであり、無限なもの、対自存在の純粋な自己である。それは空間が純粋な即自存在であり、対象的に措定されているのと同様である。否定性はそれゆえ全ての存在するものに対する最高の力であり、それゆえ全ての存在するものの真の考察方法は、存在するものをその時間において、すなわち全てがその中で消滅する契機としてあるにすぎないその概念において考察することである。」

(Jenaer Realphilosophie, Felix Meiner, S.12)

B. 「時間に関して言えば、空間の対として、純粋数学の別の素材をなすと一般に思われているが、その時間は定在する概念そのものである (der daseiende Begriff selbst)。(数学のような) 多いさの原理という没概念的原理と相等性の原理、つまり抽象的で生命なき統一の原理は、時間における生命の純粋な不安定 (reine Unruhe) と絶対的区別を把握することができない」(3・45f.)

C. 「時間は定在する概念 (der Begriff, der da ist), 空しい直観として意識に表象される概念そのものである。それゆえ精神は必然的に時間のうちに現れることになる。そして精神は自らの純粋概念を把握していない限り時間の内に現れるのである。時間は自己によって把握されていない外的な直観されただけの概念である。この概念は自己自身を把握することによってその時間形式を廃棄し、直観を概念把握する。この概念は概念把握され、概念把握する直観である。それゆえ時間は、自らにおいて完結していない精神の宿命であり、必然性として現れる」(3・584f.)

D. 「時間は純粋な自己意識である自我=自我と同一の原理である。しかし、この原理、すなわち単純な概念は、直観された単なる生成として、端的に自

己外脱出でありながら純粹な自己内存在であるような形で、まだその完全な外面性と抽象性のうちにある」(9・49)

さしあたりまず簡単に指摘しておくならば、時間と概念に関する最初の三つのテーゼは、一見同じ事柄を言っているかにみえる。しかし、よく読むとそれらの間には微妙なズレがあることが分かる。

まずAでは、全ての存在者を支配する原理としての否定性に注目し、存在者の真の考察方法として概念と時間の同一性をとらえている。Bでは数学が死せる空間、死せる一の原理をとり、時間の原理を把握できないことが批判されている。ここでも時間と概念が共に生命の純粹な否定性と絶対的区別を捉える点での同一性が主張され、Aと同様の見地がとられているかにみえる。しかしここで注意すべきは、概念に「定在する」という限定がなされていることである。つまり、時間と概念は完全に同一性であるのではなく、区別も存在するということが言われていると解釈できるであろう。Cにおいては、Bの「定在する概念」が、「空しい直観として意識に表象される概念」とされ、時間と概念の区別がより明瞭な形でのべられていると考えられる。換言するならば、時間と同一化される概念は純粹概念ではなく、定在し直観されただけの概念である、とされているのである。『精神現象学』の末尾において、時間形式を止揚した純粹概念の世界が志向されていると考えられるのである。

しかし、そもそも時間を概念との関係で考える、という事自体極めて特異な視座であり直ちには理解しがたい事柄である。一体いかなる内在的連関が両者の間にあるのだろうか。さらにDの時間と自我の関係もそこにからんできて、ヘーゲルにおいては時間、概念、自我がいわば三位一体的構造で捉えられていくのであるが、この構造は常識的には人々の理解をはるかに越えるものであろう。幸いにして概念と時間の関係については、コジェーブがこの問題のもつ哲学的背景と意味について精力的な考察をおこなっている。まずはコジェーブの考察を手がかりにこの問題の理解を深めていくことにしよう。

## I-1 概念と時間

コジェーブは *Introduction à la lecture de Hegel* (邦訳『ヘーゲル読解入門』国文社) 所収の「永遠・時間・概念についての覚書」において<sup>(3)</sup>、概念と永遠性もしくは永遠なるものとの関係、さらには概念と時間そのものもしくは時間的なものとの関係のありかたを哲学史のなかに探り、哲学の基本性格をその観点から整理する試みをしている。彼の提起するこれらの諸項をめぐる哲学史上の類型は次のようなものである。

(1) 概念=永遠性

(2) 概念=永遠なもの・これは次のものに関係する  $\left\{ \begin{array}{l} \text{イ 永遠性 ---} \\ \text{ロ 時間} \end{array} \right. \left\{ \begin{array}{l} \text{時間の外} \\ \text{時間の内} \end{array} \right.$

(3) 概念=時間

(4) {概念=時間的なもの}

たとえばパルメニデスやスピノザは概念を永遠性と同一視した(1)が、そのことは概念と人間が関係せず、世界の内における人間の時間的存在性は解明不可能になることを意味する。カントの場合は、カテゴリーという永遠な概念を使用できるためにはそれを時間に関係づけ、「図式化」せねばならなかった。図式論が先験的世界と現象界を媒介するわけであるが、思惟が時間のなかで行われることが人間にとって偶然でなく、本質的な事である事を見て取ったのはカントが最初である、と高く評価される。コジェーブによれば、プラトン、アリストテレスの哲学や一般にカント以前の哲学は、自我は時間の外で思惟することができると思なされており、人間的でないということになる。要するにカントにおいては概念は「永遠なもの」であるが時間に関係する、というありかたをしているわけであるが [(2)ーロ]、このカントの把握は人間学的次元では次のような事を意味する。概念が「永遠なもの」であるのは、人間の中に何か人間を時間の外に据えるものがあるということであり、それがカントの言う自由であり、「実践理性」、「純粹意思」として捉えら

れた「超越論的自我」である。自由な活動は時間に関係しながら時間の外に存在することになる。このような構造がカントにおける概念、時間、永遠なるものの関係のありかたであり、それはカント哲学の基本構造でもあるとコジェーブは考えるのである。また（４）の類型は抽象的可能的組み合わせとしてのみ考えられるだけであって、概念が時間的であるということは真理の観念自体を否定することであり、哲学上可能な形態ではないとされる。

そしてこのコジェーブの講義の眼目は、ヘーゲルを時間と概念を同一視する哲学である（３）の類型の代表として位置づけ、哲学史上の画期を為すものと評価することである。つまりヘーゲルはカントが概念を永遠でありつつ図式化によって時間に関係づけた方向をさらに進め、概念と時間を同一化した。コジェーブによれば「ヘーゲルの全哲学ないし『学』は、『時間とは経験的現存在に』<sup>(4)</sup>、つまり実在する空間或いは世界に『現存在する概念そのものである』という引用文一つに要約される」（テーゼ B 参照）。ヘーゲルはそのことによってプラトン、アリストテレス、カントとならぶ哲学者になったのであり、哲学史はプラトンからカントに至る時代とヘーゲルから始まる時代に二分されるという。

このようにみてくると概念と時間をめぐる問題性がある程度理解されるように思われる。そのことについてはコジェーブに感謝したいのであるが、ヘーゲルに即してその事柄が正しく解釈されているかに関しては大いに疑問を抱かざるを得ない。コジェーブはヘーゲルにおける概念と時間の関係を次のように解釈するのである。

人間は世界において言葉を話す唯一の存在であり、受肉したロゴス（あるいは言説 discours）である。つまり人間は概念が定在したものであり、「経験的に現存在（定在）する概念」とは人間のことでありとされる。そして時間も「経験的に現存在（定在）する概念」とであると述べることは、時間が人間である、と述べることになる。『精神現象学』においては人間の経験の世界、いふなれば時間的存在として人間が記述されているのであり、『精神現象学』において人間について述べていることは、すべて時間にも妥当するとされる。

特に概念と時間との関係についてコジェーブはヘーゲルの、あらゆる概念把握は殺害に等しい、というテーゼから出発しつつ、独自の理解を展開する。ある概念（たとえば犬という概念）を考えた場合、それが形成されるのは感覚的ないまところから切り離され、意味（本質）として措定されるということであり、実在の犬はそこでは死んでしまう。抽象概念が可能になるのは、犬が本質的に死すべき存在であり、各瞬間が過去として無化していくからであり、もし犬が永遠なものならば、犬という概念は決して犬そのものから切り離せない。つまり、概念が世界の内に経験的現存在（この経験的現存在は人間的現存在以外のなにものでもないコジェーブはいうが）を有しうるのは、世界が時間的であり、時間が世界の内に経験的現存在を有するかぎりである、ということになる。以上の様な枠組みでコジェーブは、ヘーゲルにおける時間、概念、人間の三位一体を解釈するわけである。

コジェーブの概念理解には問題が多いと言わなければならない。彼のヘーゲル解釈は以前にも指摘したように、人間の欲望、労働、死などを中心的視座とした極めて人間主義的、主観主義的なものであるが、概念を基本的に、「人間のもつロゴス、言説」に等置し、犬の「概念」といった言い方が可能であるとするとところにも如実にそのことが現れている。これは「概念」という言葉の通俗的な使用法と変わらない。もっともコジェーブも単なる個別の名称だけでなく、「存在」の意味といったようなある種存在論的レベルも考慮している。しかしその際も、存在の定在を過去へと無化したうえでの（そのことをなすのが時間であるが）いわば蒸留された意味としての概念である。このような理解はヘーゲルの「概念」がもっている存在論的意味とはかけ離れたものであるように思われる。

概念とはヘーゲルにとって単に主観的なものではない。むしろ第一義的には存在そのものに内在する、生命性、リズムである。「自らの存在において自らの概念であるという、存在するもののこの本性の内にこそ、一般に論理的必然性が存立するということがある。この必然性だけが理性的なものであり、

有機的全体のリズムである」(3・55)。存在そのものが概念であり、存在のもつ概念のリズムと必然性を理性的に把握することが「学」を成立させるのである。『論理学』でも概念の世界は、存在論と本質論を前提にしつつ、「実体の完成」がなされ、存在の内奥の運動性が捉えられていく世界であり、存在の自己性、主体性が明らかとなる世界である。「実体の完成はもはや実体そのものではなくより高次のもの、つまり概念であり主体である」(6・249)。これはすなわちヘーゲル哲学の眼目である、実体＝主体の世界の実現である。概念はまた「自由の国」ともいわれる。概念にまで開放された実体は、自己自身の原因として「自己に透明な明瞭性」(sich selbst durchsichtige Klarheit)が成立しており、措定されていることと自己同一性の同一性が成立している。これは自由ということであるのだ。

概念というのはこのように存在の世界がその実体性を完全に克服し、主体的になった世界であり、その意味で自我と同じ論理性を獲得している。「概念がそれ自身として自由であるような実存 (Existenz) にまで達するかぎり、概念は自我または純粹自己意識にほかならない。たしかに自我は諸概念を、特定の諸概念を持つ。しかし、自我は概念として定在するようになった純粹概念そのものなのである」(6・253)。概念と自我の同一性を論理的に言うならそれは、自己と他者を対立させ、他者を排斥する絶対的に規定されたものでありつつ、そのような規定性を自己の中に解消し統一している普遍性としてのありかた、すなわち「絶対的否定性 (absolute Negativität)」が概念としての自我の本質をなすのである。

概念と自我の同一性ということは思惟と存在の同一性ということでもあり、ヘーゲル哲学を貫くいわば通奏低音であるが、コジェーブの「概念」理解には以上簡単に確認したようなヘーゲルの存在論的背景が全くといってよいほど考慮されておらず、人間はロゴスや概念をもつ存在だという、極めて通俗的、常識的な理解に終始している。コジェーブのような、物がある特性を持つように自我が諸々の概念をもつという理解はまさにヘーゲルが『論理学』において「常識的な見方」として批判した捉え方にほかならない。ヘーゲルがカ

